

雲棲株宏の阿弥陀経解釈

——信・願・行の三資糧を中心にして——

岩 城 英 規

一 序——問題の所在——

明末四大名家の一人である雲棲株宏（一五三二—一六二二）は、その時代背景から、仏教を中心としつつ儒学など幅広い教養を持った知識人として、当時の仏教界に大きな影響を与えたが、仏教者としての彼は、蓮宗第七祖と称されたように真摯な浄土信仰者であり、彼の浄土観を示した『阿弥陀経疏鈔』は、後代の中国において阿弥陀経解釈の基本とされた。望月信亨博士は『中国浄土教理史』の中で、「信・願・行」

説が阿弥陀経解釈において重要な役割を果たすことを指摘しており、本著において、宋代以降の浄土思想家及び阿弥陀経注釈書を紹介する部分では、「信・願・行」説の有無やそれぞれの語句の意味に重点をおいて説明がなされている。⁽¹⁾

本稿は、この望月博士の先行研究を踏まえた上で、雲棲株宏の阿弥陀経解釈について、彼の解釈の特徴である「信・願・

行」説に焦点を絞って考察することを中心に、「信・願・行」説の淵源をも検討することによって、宋代以降の中国仏教における阿弥陀経解釈の変遷を解明する一助となることを目的とするものである。

二 雲棲株宏における「信・願・行」の解釈

雲棲株宏が自らの浄土思想を体系的に示したものとして、『阿弥陀経疏鈔』が挙げられる。これは宋代から明代までの主な注釈書を踏まえた上で、彼の基礎学である華嚴教学を縦横に駆使して、禅淨一致・唯心浄土の立場から『阿弥陀経』を解釈したものであり、これ以後、中国においてはこの『阿弥陀経疏鈔』が解釈の標準となった。

そこでまず初めに、株宏の「信・願・行」説について、順に見ていくことにする。この問題については、荒木見悟博士がすでに分析を試みているが、ここでは『阿弥陀経疏鈔』全

体から、重要と思われる用例について検討する。

―分科から信・行・願を用いる。―

此経疏鈔大文分三。初通序大意、二開章积文、三結积呪意、為順諸経序正流通三分、亦順浄業信行願故。〔阿弥陀経疏鈔〕卷一、
記統一・三三、一六五左上

『阿弥陀経疏鈔』は冒頭で『阿弥陀経』を大きく三つに分けるが、これらは諸経の序分・正宗分・流通分に相当すると同時に、信・行・願に相当すると考えており、分科から信・行・願を用いている。

―信・願・行の定義（1）―

前三非器、謂無信者・無願者・無行者、反是皆器。

信謂信生仏不二。衆生念仏、定得往生究竟成仏故、如経所云『汝等皆当信受我語』是也。願謂信非徒信。如子憶母、瞻依向慕必欲往生故、如経所云『应当発願生彼国土』是也。行謂願非虚願。常行精進念念相続無有間断故、如経所云『執持名号一心不乱』是也。此之三事号为資糧（中略）世人雖行衆善、於彼仏土無信行願亦名非器、雖有諸過、於彼仏土有信行願亦名為器。（卷一、一七七右下〜左上）

―信・願・行の定義（2）―

復有三義。聞説仏名心不疑貳、是之謂信、信已而執心起衆欲、是之謂願、願已而持心勤精進、是之謂行。（卷三、一二二左下）

ここでは信・願・行の定義とそれに相当する阿弥陀経本文

が示されている。株宏の解釈において特徴的なことは、信・願・行をすべて機の側が起すべきものとして捉え、阿弥陀仏が衆生に対して行うものという觀念が見られない点である。このことは、彼の浄土思想が、親鸞を中心とする日本の浄土思想と著しく相違することを示すものである。

それでは次に、信・願・行の中で最も重要なもの、及び信・願・行の展開の順序について見る。

―信・願・行の中で最も重要なもの―

今『重信』者、此経以信為主。（卷三、二〇九左下）

―信・願・行の順序―

因信生願、因願起行。（卷四、二四四右下）

株宏は三つの資糧の中で信を最も重視していると同時に、この例及び上述した信・願・行の定義に関する二例から、信から願が起こり願から行が起こるという展開を考えていることがわかる。ここにおいて、分科から信・行・願を用いるという最初に挙げた例との矛盾が現れるが、最初の例は、以下に示す子元の影響を受けたものと解釈される。

―信・願・行の根本には智がある。―

而諸衆生修浄土者、以智生信則為正信、以智発願則為弘願、以智起行則為妙行。（卷二、一九五右下）

株宏はさらに、信・願・行の前提として智慧を置き、三つの資糧の根本と考えている。智を根本に置くこの解釈は李通

玄思想との関係が考えられ、検討すべき問題が数多くあるの
で、この点については稿を改めて論じたい。

最後に、阿陀弥経本文を解釈するときにこの信・願・行を
どのように用いているかを見ることにする。

―経文解釈における信・願・行の応用(1)―

(経文：舍利弗、衆生聞者应当發願願生彼國。)

又聞摂信義、願摂行義。三事資糧、悉備於此。

聞然後信、匪聞則信自何生。願然後行、無願則行何緣起。下文信
行、此為本原。信行願三、淨土資糧、充足無欠。(卷三、二一八
右上)

―経文解釈における信・願・行の応用(2)―

(経文：聞仏所説歡喜信受作礼而去。)

三資糧者、如上聞而信即信資、信而受即願資、受而去即行資也。

(卷四、二四四右上)

以上のように株宏は、信によって願が起り、願によって
行が起るという連鎖的図式を考えていることがわかる。

三 株宏の解釈の淵源

株宏が唱える信・願・行の三資糧という概念は、彼の独創
ではなく先人の思想を少しずつ発展させてきたものである。

ここでは宋代以降の阿陀弥経注釈を見ることにより、株宏の
解釈の淵源を探っていくことにする。

三・一、元照まで―願・行

宋代の律師である靈芝元照は、淨土教に関しても幾つかの
著作を残したが、その中の『阿陀弥経義疏』には三資糧の前
段階と考えられる説明が見られる。元照においては、信・願・
行という三つのものはすでに現れているが、信と願行とを統
合して三資糧とする段階にはまだ至っていない。願と行とを
一組とする注釈はほかにもあり、元代の天台僧である湛然性
澄も元照と同様な解釈をしている。

株宏は先人の解釈を総括して、次のように述べている。

今明此經古有多解、有謂信願為宗、有謂超過三界二種清淨為宗、
令諸衆生得不退転為趣。

信願為宗者諸解多同、以經中屢言「若有信者应当發願願生彼國土」
故。『阿陀弥経疏鈔』卷一、一七九右下)

株宏の述べる先人が具体的に誰を指すのかは明らかでない
が、以上の二例によると先人の解釈には、經典の主旨を信・
願とするものと、願・行とするものの二種類があることがわ
かる。この両者は願を共通のものとしているため、願を媒介
として、信・願・行の三つを淨土の三資糧に確定したことは
想像に難くない。これを初めて提示したのが、次に述べる子
元である。

三・二、子元・普度―信・行・願

白蓮宗を興した南宋の子元について、現存する著作はない

が、弟子の普度が著した『蓮宗寶鑑』は子元の遺著に基づいて白蓮宗の教義を立てたものである。これを見ることにより、子元の主張を理解することができる。『蓮宗寶鑑』は全十篇から成るが、その項目として「念仏正信説」・「念仏正行説」・「念仏正願説」をこの順序で立てており、信・行・願を同列に扱っていることが知られる。子元が考えた三つの資糧とは、浄土往生の法として信・行・願があり、正信を起し正行を修し、正願によってその行を導くとするものである。

四 結論―「信・願・行」説の展開の系譜―

「信・願・行」説は、雲棲株宏の阿弥陀経注釈の中で大きな位置を占め、従来その解釈は彼の独創によるものと見なされてきた。しかしこの「信・願・行」説が、子元がその著において著したのが始めであることは、望月信亨博士によってすでに指摘されている。⁴この子元の解釈の淵源を探り、下つては株宏の解釈の展開を見ることが本研究の目的であるが、上述の引用及びその検討により、解明への端緒が開かれたと考えられる。そこで最後に、阿弥陀経注釈における「信・願・行」説の展開の系譜を提示したい。

「信・願・行」説の萌芽は元照までの諸師が提示した「願・行」であり、これに「信」を加えて「信・願・行」を並立させたのが宋代の子元である。彼はその著『蓮宗寶鑑』におい

て、念仏を「正信」・「正行」・「正願」の角度から捉えており、後の注釈の原型となる。ただし子元の説明は、浄土あるいは念仏という一般論においてこの三種を提示している上に、語の順序も信・行・願として三者を並列しているにすぎない。元から明代の注釈書には、基本的に元照の説を踏襲し經典の主旨として願・行を考えるものを始め、信・願を考えるものなど諸説が並立していた。これらを統合し、子元が浄土一般において施した「信・願・行」を『阿弥陀経』の主旨にあてはめて解釈したのが雲棲株宏であり、ここにおいて「信・願・行」は思想的発展を遂げ、「信・願・行」説と呼べるような相互に有機的関連を有するものとなったのである。雲棲株宏の阿弥陀経注釈史上における功績は、まさにこの点にあると考えられる。

1 望月信亨『中国浄土教理史』第三十一―三十九章。

2 荒木見悟『雲棲株宏の研究』一三一・一四四―一四六頁。

3 『観無量寿仏経義疏』において、上品上生が備えるものとして五種を示しており、その中に信・願・行も含まれている。

第十四上輩有五。一、発菩提心、大乘心也。二、解第一義、大乘解也。三、修行諸行、大乘行也。四、深信因果、大乘信也。

五、迴向往生、大乘願也。如此五法、上三品中出沒互見、上品上生具五。經明三心三行是也。（巻下、大三七―一九九下）。

4 望月信亨『中国浄土教理史』第三十一章。